様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２５０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２７９１

研究課題名（和文）初任英語教員の教科指導の向上と学校での問題克服を支援するシステムの提案

研究課題名（英文）A Proposal for a Support System to Improve the Teaching Method of a Novice English Teacher and Overcome Problems at School

研究代表者
望月　正道（Mochizuki, Masamichi）

麗澤大学・外国語学部・教授

研究者番号：９０２４５２７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：若手英語教員の成長を支援するシステムの開発を目的に、同一教員の授業を撮影し、授業研究を1学期に1回をめどに2年間で6回行った。授業研究協議では、授業のさまざまな点について意見が交換された。この授業研究により、若手教員は、授業運営、指導内容、指導技術、英語でのやりとりのように幅広い側面で成長を見せた。この科研の成果は、同一教員の授業を継続的に授業研究することの有効性が確認できたことである。

研究成果の概要（英文）：This research aims at developing a support system that improves a novice English teacher by holding six lesson studies over two years. In the lesson studies the participants discussed a variety of aspects of the young teacher's lessons and exchanged various ideas to improve the lessons. Through the lesson studies the young teacher has improved her class management, teaching contents, teaching techniques, and English interaction with her students. The research concludes that continuous lesson studies of the same teacher are effective in teacher development.

研究分野：英語教育学

キーワード：教員養成　授業研究　教師の成長　英語授業　ワークショップ形式

１．研究開始当初の背景

学習指導要領で英語の授業は英語で行うことを基本とする現在、英語教師はその指導法を向上させ、成長していくことが求められる。教師の成長をはかるために、教師が授業を公開し、そのあと参観者と意見を交換する授業研究は学校や地域単位で行われてきている。公開授業の後には授業研究協議が続き、授業者と参観者が授業の目的、教材、方法などについて意見を交換し、互いの授業力を向上させようとする。

新任教員にベテラン教員を指導教官として割り当てることがあるが、これはベテラン教員の経験を伝えるものである。しかしながら、英語を英語で教えることのないベテラン教員が指導教官の場合、新任英語教員にどのように英語で指導したらよいかを助言できるのだろうか。新任教員は、自らが英語で授業を受けた経験がないわけであるから、どのような授業をしたらよいかのモデルはわからないだろう。

２．研究の目的

本研究は、若手の高校教員の授業とインタビューを分析することによって、教科指導と教員業務の２つの観点から、新任からの経験が少ない教員はどのような問題を抱え、それを解決するためにどのような支援が必要かを明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

３年間の研究期間のうちに、最初の２年間で研究協力者の１人である若手高校教員の授業を参観、ビデオ撮影、インタビュー、授業研究協議を研究分担者と研究協力者とともに６回行う。授業研究協議は、付箋を用いたワークショップ型である。付箋のコメントと授業研究協議の逐語記録を作成し、３年目に、研究代表者と研究分担者は、２年間で収集したデータを質的に分析する。

４．研究成果

授業研究での付箋コメントや逐語記録を分析することから、多くの点で若手教師が成長していることの証拠が見いだせた。

（1）付箋コメント内容の変化

付箋のコメントを分類した研究では、若手教師の英語教授力に関するもので、英語教師の資質・能力に関するものはほとんどなかった。27 年度は指導技術と学習者の行動についてのものが半数ちかく占めていたが、28 年度はこれらの分類の付箋が減り、指導・活動の設定に関するものが半数を占めるように変化している。これは若手教師の指導技術が向上し、授業研究協議会の参加者の関心が授業の内容、指導や活動の妥当性について向かっていったことを示している。

（2）付箋評価の変化

付箋のコメントの評価を分類した研究では、「英語授業研究のためのフレームワーク 2.0」(望月・小菅、2017)の「英語教授力・授業デザイン・指導・活動の設定(2A エ)」に分類される付箋を分析し、その割合が授業研究協議を重ねるごとに増えていること、さらにそれらの付箋のうち「良い点」としてコメントされている割合が増加していることを若手教師の成長の証とみている。具体的には、「コミュニケーションにつながる活動・生徒主体の活動」と「指導の適切さ：十分な指導、目的が明確な指導」に関して良いとするコメントが多く見られた。その一方で、疑問点・改善点に関する付箋も減少するわけでなく、改善点は見られるものの、若手教師にさらなる成長を授業研究協議の参加者は期待していることが伺われる。

（3）対応分析に見られる変化

授業研究協議会の逐語記録を対応分析することにより、若手英語教師の成長の証を見出すことを試みた。対応分析によって特徴語として抽出された語のうち、「サマリー」「キーワード」「音読」「発音」という語が複数年の授業研究協議で使われていた。「サマリー」と「キーワード」について、平成 26 年度ではオーラル・サマリーをさせようとするのだが、生徒はキーワードではなく要約そのものを書き、それを音読していた。それに対して、平成 28 年度はキーワードをもとにオーラル・サマリーをするように変化した。「音読」という特徴語は、平成 26 年度はきちんとした音読指導がされていなかったが、平成 27 年度は授業者が音読の重要性を認識し、音読指導の質・量ともに改善が見られたことを示している。「発音」という特徴語は、平成 27 年度に音読指導を重要視するようになってから、発音指導もするようになったこと、しかし、平成 28 年度も発音指導のあり方には問題が残ることを表している。このように、対応分析の特徴語が年度を追うにつれて肯定的な意味で使われるようになっていることから、授業の内容や指導技術が向上していることを表しているといえる。これは、授業者が成長していることの証と考えることができる。

（4）指導技術の向上

付箋コメントのうち指導技術に関するものに焦点をあてて分析した。最初は疑問点・改善点についてのものが多かったが、最終的には疑問点が減り、それでも良い点に関するコメント数は変化がないことから、相対的に授業者の成長を裏付けているといえる。その理由として、授業実践を観察することで、気づきあるいは授業研究協議会でのコメントを受け、それを内在化・応用して、授業改善につなげていくという第二言語習得過程のモデルを元にした成長のモデルで説明している。

（5）インタラクションの向上

教師と生徒間のインタラクションを主に量的な面から比較し、その変化から教師の成長を裏付けようと試みたものである。具体的

には、2 年間計 6 回の授業における教師及び生徒の発言や行動を改訂版 CARES-EFL(兼重、2000)にフリーカテゴリーを追加した枠組みを使って分類し、年度ごとにインタラクションの試みの回数や成功率、またインタラクションの試みが行われた状況を比較した。その結果、教師―生徒間のインタラクションの試みは 27 年度の 258 回から 28 年度は 339 回へと 31.4%増加しており、教師―生徒間のインタラクションの成功率も、27 年度の 55.8%から 28 年度の 74.0%へと 18.2%上昇した。また、2 年目の授業では、生徒が作業や活動をしている間に生徒から教師への質問や、教師から生徒へのインタラクションの試みが見られるようになった。これらの変化は、生徒とのインタラクションに対する教師の積極性や生徒の発言を引き出すインタラクションの技能の向上という点で、教師の成長を示唆していると考えられる。

（6）授業者自身の内省に見られる成長

3 年間の若手教師の成長を 2 年目、3 年目の授業研究協議会の後の半構造化インタビューでの授業者自身の言葉から見出そうというものである。6 回のインタビューの逐語録の分析からは、「生徒の発話」「生徒とのやりとり」「本文の内容理解」が授業者の省察に多く見られた。授業者は当初から「生徒が英語を発話する機会を増やすこと」が大切だと考え、「生徒とのやりとりを行うこと」を課題意識として持っていた。授業者は最初生徒全員に話しかけることに不安を感じていたが、授業研究協議での助言をもとに省察し授業内容や方法を変えていくことで、生徒とのやりとりが増え、スムーズに進められるようになったことで自信を持って授業ができるようになっていったことがインタビューから伺える。これは授業者の大きな成長ということができるだろう。この成長は、授業者がたえず自分の授業を省察し、協議会での意見を前向きに受け止め、自分の信念、実践の課題意識、授業中の生徒の様子などを取捨選択の基準として、採用していったことの結果であると推察される。一方で、この研究は授業研究協議会の進め方について 2 点を提案している。ひとつは、授業者の課題意識や信念をまず語ってもらい、協議会の参加者は議論すべき課題を授業者の視点から焦点化し、共有すべきだということである。ふたつめは、複数回の授業研究協議会をもち、2 回目以降は、授業者は前回の学びをどのように実践で活かしたかと日々の授業での生徒の反応や変容を語ることから始めるというものである。

このように本報告書は、3 年間にわたる 10 回の授業研究協議会をとおして若手教師が成長する証を見出したということができる。本科研の研究課題は「初任英語教員の教科指導の向上と学校での問題克服を支援するシステムの提案」である。この課題において、「教科指導の向上」は確認できたが、「学校での問題克服」については探究することができなかった。その理由として、研究授業は、「教科指導の向上」に焦点が当てられることが一般的であり、本科研の研究授業においても、「教科指導の向上」に焦点が当てられたからである。しかしながら、本科研では、長期的に一人の若手教師に着目し、継続的に研究授業を行ったことから、「教科指導の向上を支援するシステムの提案」については、以下の 2 点が示唆される。まず、複数回の授業研究協議会をもつことは教科指導の向上に役立つだろう。複数回の授業研究を行うことで、授業者の教科指導に向上が見られたところとそうでないところが明確にわかる。向上が見られない点は引き続き、考慮が必要な点として意識すべきである。しかしながら、協議会での意見や助言を活かすかどうかは授業者自身によるところが大きい。いかに良い助言がなされたところで、授業者がそれを活かそうという意思がなければ授業の改善にはつながらない。その意味で授業者の課題意識や信念に基づいた協議会での議論は重要と考えられる。授業者の視点に立った提案や助言は、より受け入れやすいものになり、授業改善につながりやすいと考えられる。「初任英語教員の教科指導の向上を支援するシステムの提案」ということであれば、本科研では、教職経験年数が異なる多様な背景を持つメンバーが、研究協議会に参加し、多様な視点からディスカッションが行われたことで、授業者の気づきや省察が促された。学校内で授業研究を行う場合は、必ずしも英語科の同僚のみが参加するわけではない。しかしながら、授業者は、学校の文脈を理解した上での新たな視点からのフィードバックにより、省察が促されると考える。その意味で、「学校での問題克服」につながる気づきも得られる可能性がある。

一方、学校外で授業研究を行う場合は、同僚とのしがらみがなく、学校では同僚に打ち明けられない「学校での問題」を別の教員と共有することで、学校での問題の解決の糸口を見つけられる可能性もある。学校内外両方のネットワーク構築も意識しながら、初任教員は学校内あるいは地域単位で初年度だけでなく、2 年から 3 年にわたり授業研究を行うようなシステムを構築することが望ましい。今後、さらに「初任英語教員の教科指導の向上と学校での問題克服を支援するシステム」の構築について探求していきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 小菅敦子・小菅和也(2018)「付箋を用いた英語授業研究協議―若手英語教師の成長―」『武蔵野教育学論集第 4 号』,81-89．査読無

② 望月正道(2018)「若手教師の成長－3 年間の授業研究協議の対応分析」『麗澤レビュー第 24 号』投稿中
③ 若有保彦(2018)「若手英語教師の成長過程－教師と生徒のインタラクションの分析を通して－」『東北英語教育学会紀要』第 38 号，49-63． 査読有
④ 髙木亜希子(2018)「若手英語教師による学びと成長の軌跡－授業研究協議会後のインタビュー分析に基づく教師の認知」JACET 教育問題研究会会誌『言語教師教育』Vol．5 No．1，47-67．査読有
⑤ 望月正道・小菅敦子 (2017)「英語授業研究のためのフレームワーク」『中部地区英語教育学会紀要』第 46 号,141-148.査読有
⑥ 若有保彦(2016)「英語授業の研究協議を考える－若林俊輔先生が提案した「授業研究シート」の考察」『語研ジャーナル』第 15 号,83-90.査読無

〔学会発表〕（計５件）
① 望月正道(2017)「若手教師の 3 年間の成長－計量テキスト分析から見えてくるもの－」第 41 回関東甲信越英語教育学会新潟研究大会自由研究発表
② 望月正道(2017)「若手教師の 3 年間の成長：授業研究協議を通して(1)－付箋が語るもの－」第 43 回全国英語教育学会島根研究大会自由研究発表
③ 望月正道・小菅敦子(2017)「英語授業研究のためのフレームワーク改訂」第 47 回中部地区英語教育学会長野大会自由研究発表
④ 望月正道・小菅敦子(2016)「若手教師と熟練教師は授業研究で何に注目しているか－英語授業研究のためのフレームワークを用いた付箋分析－」第 42 回全国英語教育学会埼玉研究大会自由研究発表
⑤ 望月正道・小菅敦子(2016)「英語授業研究のためのフレームワーク」第 46 回中部地区英語教育学会三重大会自由研究発表

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://mochvocab.sakura.ne.jp/img/file11.pdf

６．研究組織
(1)研究代表者
望月　正道（MOCHIZUKI, Masamichi）
麗澤大学・外国語学部・教授
研究者番号：９０２４５２７５

(2)研究分担者
小菅　和也（KOSUGE, Kazuya）
武蔵野大学・教育学部・教授
研究者番号：００３２８００６

若有　保彦（WAKAARI, Yasuhiko）
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：３０４５１６５２

髙木　亜希子（TAKAGI, Akiko）
青山学院大学・教育人間科学学部・教授
研究者番号：５０３４３６２９

淡路　佳昌（AWAJI, Yoshimasa）
大東文化大学・外国語学部・准教授
研究者番号：９０２５９８２０

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：

(4)研究協力者
小菅　敦子（KOSUGE, Atsuko）
富島　奈央（TOMISHIMA, Nao）
薄葉　みわ子（USUBA, Miwako）
原　菜摘（HARA, Natsumi）
森　靖子（MORI, Yasuko）
杉本　崇（SUGIMOTO, Takashi）
渡邉　朗（WATANABE, Akira）